

---

**きっと、また、会える。**

高橋熱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きつと、また、会える。

### 【Nコード】

N4254U

### 【作者名】

高橋熱

### 【あらすじ】

とある市役所出張所で存続の危機に瀕している「インターネット閲覧コーナー」。雨の日も風邪の日も、毎日のように立ち寄る一人の女の子。それには主任にも僕にも内緒にしている深い理由があった。彼女が見ているモニターの先にあるものとは…。

子供の目線を意識しながら、ちよつと可愛く、ちよつと切ない物語を描いてみました。

僕がその出張所に配属になって真っ先に与えられた職務は「いないもの整理」だった。

「市民の目線に立ち、当出張所内の不要なもの、邪魔なものを整理して、来所する市民の安全とサービス、職場の労働環境を改善、向上させることが目的」などと、いかにもお役所的な大義名分であったが、僕には単なる「雑用係」としか思えなかった。

故郷の市役所に就職して以来、ごみ減量だの用地買収だの年金督促だの、地味だがタフなセクションにばかり配属されている。そんな仕事をするために市役所に就職したわけじゃないぞ、と不貞腐りたくもなるが「若手は少ないから仕方ないよ」と、主任はいつも気を使ってくれる。

「この前、次長から『すぐ整理する課』があったら、君は即刻課長になれる』と言われましたが、あれって褒め言葉と受け取ってもいいんですか？」

「あの次長、ちょっと変わってるからまともな相手にしない方がいいよ。彼なりに褒めてるつもりだとは思うけど。何せ、新規採用ゼロなんて時代だし、俺もこき使われてきたクチだから」

まだ30後半なのに、白い面積の方が多し頭を見れば、これまでの苦勞が偲ばれる。

「30過ぎで『若手のホープ』とか言われても……。もっと20代を採用していかないと、将来いびつな組織になるのは目に見えますね」

民間企業の経営感覚を身につける、と市長が豪語している割には、民間なら真っ先に手をつけているはずの中間管理職の「リストラ」が全く進んでいない。

「確かにね。でももし『すぐ整理する課』があつたら、一番にこのローカルな『出張所』が整理されるのは目に見えてるな。あと次長なんてポストも当然いらぬ」

そう言つて、主任は憚りなく笑う。あまりの声の大きさに、次長に聞かれてやしないかとこっちはらはらす。しかし、そんな主任の人あたりの良さと気さくなところが、市民部の「苦情処理係」として、長年評価されてきた所以だろう。

でも、どうしてそれだけの逸材がこんなローカルで退屈な出張所なんか配属されてくるのか、人事課の考えていることはよく分からない。いつの時代でも、人事というのはそういうものなのかもしれないけれど。

そういうわけで、その「インターネット閲覧コーナー」が槍玉に挙げられるのは、当然の成り行きだった。それは正面入り口右手、2階へ向かう階段下に設けられている、「定員2名」のささやかな市民サービスだ。

「市民が気軽にインターネットに触れられる機会の創出を」との国の予算で何となく設備してしまつたものが、まるで前近代の遺物のように、何となく残されているという感じだった。

パソコン本体は6年前に入れ替えて以降何も手を加えられていないし、1日の平均利用客数はわずか3名。果たしてこれで市民サービスなのか、と問われると甚だ疑わしい。

とはいえ、「メンテナンスは毎日しろ」という職務マニュアルがあるので、「若いからITに強いだろう」という固定観念的な上司からの指示で、僕がその管理を任されることになった。

キーボードやハードディスクに積もりに積もつた埃をかき出すことから始めて、長い間蓄積されたハード内のクリーンアップとウイルス対策ソフトの入れ直し、個人的なファイルやインターネット履

歴を抹消するソフトの導入など、当然やるべきことを当然のように行った。

しかし僕が担当するまでは、行政が不特定多数の利用者のために提供するパソコンとは到底思えない、ずさんな管理だった。というより、これまでほとんど管理するなんてこともなかったようだ。女性職員が、朝パソコンを立ち上げて4時を過ぎたら電源を落とすというルーティンを繰り返していただけだった。

幸い、悪さをするようなソフトがダウンロードされた形跡はないようだが、ウイルス対策のファイル更新は半年前にストップしたままだったし、「マイドキュメント」には、エロ画像やら音楽ファイルやら、ウィンドウズに関するお役立ちツールなどがいくつか保存されていた。

回線は役所本体の回線とは別にひいているので、仮にウイルスに冒されたとしても、まさか「市民税滞納者リスト」が流出する危険性はないが、お客様をお迎えするイントランスで、突然足を広げた若い女性の動画が流れ出したなんていったら洒落にならない。

「大体、『インターネットを閲覧する』なんていう言い方、おかしくないか？」

「言い方の問題ではないと思いますが」

「こんなところで『閲覧』しなければならぬ人ってどんな人なのかね？」

「まだまだパソコンは高価ですし、それに操作も分からないお年寄りも多くいます」

「平均利用者3人というのは何とかならないの？」

「それはあくまでも平均値でして、多い日は10人を超える日もあるんですよ」

「少ない日は？」

「0人です」

「使っているのは、決まった年寄りと子供と、あとは暇な若者だけなんだろう？ 特定の人だけで占有されるサービスってというのは、オンラインブズマンにも目をつけられやすくないだよねえ」

「年寄りも子供もニートも私たちにとっては市民でありますし、それにちよつとした調べ物をするには調度いいと」

「即刻、廃止」

「いやいや、次長、ちよつと待ってくださいよ」

いつものように次長と主任の間で、コーナー存続の可否を巡る論争が繰り広げられる。個人的な見解としては別にあってもなくても市民サービス上何ら問題はないと思う。僕の仕事も一つ減るわけだし。

ただ、ちよつとだけ調べ物をするといっても、台帳に住所や氏名、電話番号、利用目的、利用時間まで書かせるのはどうなのか。記入している間に、調べ物の一つや二つ終わってしまう。こういうところが実にお役所である。何でも実績とエビデンスの時代だから仕方ないといえばそうだけれど。

しかし、主任は、このコーナーの維持に強いこだわりを持っている。 「一人の市民の後ろに、百人の同意見の市民がいると思え」が持論の彼にとつて、実績だけでいきなり廃止、というのは納得できないようだ。

というのは表向きの理由であつて、主任が存続を希望する理由が僕には何となく分かつていた。それは、最近毎日のように学校帰りに訪れる女の子のことだ。

背格好からおそらく小学校3年生か4年生くらい、さらさらのシヨートヘアでいつもフレアスカートを履いている、いいところのお嬢さんという感じの女の子だった。はきはきとして礼儀正しいし、

パソコンをする姿勢も背筋がしゃんと伸びている。

最近の小学校では、パソコンを日常的に授業に取り入れられているようで、マウスのクリックやキーボードのタッチもなかなか堂に入っている。

彼女がここにくるのは大体平日の午後2時半から3時半、ほとんど毎日だ。来る時間が日によってずれているのは、5時間目の日と6時間目の日があるからだろう。

実際に椅子に座っている時間はそれほど長くはない。せいぜい15分から20分程度。時間がくると、必ずきちつと最初の画面に戻して、僕に「ありがとう」と深々一礼してから、跳ねるように飛び出していく。

主任にはその子と同じ年頃の子供がいたのだが、3年前、交通事故で亡くしていた。学校から帰宅した後、主任の子供は同じ住宅地の友達の家に自転車で出かけた。主任には、一箇所だけ、気になるポイントがあった。そこは、幅5メートルほどの私道が直角に折れ曲がり、こちらからもあちらからも見通しの悪い道路で、その割りにはかなりの勢いで乗用車が入れ違うこともある道だった。

事故が起きたのは、石田主任が一市民として、「道路補修センター」にカーブミラーの設置承諾を取り付けたまさにその日の出来事だった。

「だぶるんだよねえ」と、主任はたびたび僕に言った。

「ちょうど、あんな感じのヘアスタイルだね。ジーンズよりスカートが好きだった」

「今の小学生ってしっかりしてますよね」

「うちの子も、しっかりしてたよ」

「礼儀正しかったんですか？」

「親を見なさいよ。もうすぐ3回忌か。早いよな」

僕の前ではそれほど悲しい素振りは見せたことはないが、手塩にかけて育て上げてきた、たった一人の子供を亡くした親の悲しみは、きつと想像もできないくらい深いものがあるのだろう。

「インターネット閲覧コーナー」の維持を頑なに譲らない背景には、今はなき我が子とだぶる彼女のこともあるように思えてならない。

2時45分、いつものようにエントランスの自動ドアが開き、黒髪の少女がリノリウムの上で軽快にスニーカーを滑らせながら、印鑑証明の申請用紙を補充する僕に向かって愛想良く微笑んだ。

「今日もよろしくお願いします」

「毎日熱心だね。名前と住所はこっちで書いておくから、使っていないよ」

「駄目だよ、ちゃんと書かなくちゃ。ルールでしょ？ 前、あそこのおばさんにそう言われたよ？」

公務員たるもの、規約や取り決めに破るのはご法度だ。全く、こちらが彼女に教育されている。

あそこのおばさん、とは樋口さんのことだろう。こんな子供にまで杓子定規にしなくてもいいじゃないかと思う。融通も気も利かないお局は悲劇を通り越して喜劇ですらある。

台帳に、太くてしっかりした形のいい字が並ぶ。

「加無木さやか」。

珍しい名前だった。最初、それをどう読んでいいものか分からなかった。「まさか、かなしきさやか」じゃないよね？」

「かむき、って読むんだよ」と彼女は言った。「この町じゃうちだけしかいないって、ママが言ってた」

他の市町村を見ても、そう見かける名前じゃないだろう。何度も口に出して言ってみると、品のいい、優しい響きだ。

住所は同じ町内の3丁目。出張所前の市道を挟んで向こう側が3丁目だから、自宅もすぐその辺り。使用目的欄は、いつも「メール」だった。

「時間は気にしなくていいからね。さやちゃん貸切だから、このパソコン」

「ううん、そんなに長くはできないんだ。宿題もしなくちゃいけないし。今日は、習い事もあるの。ママの大好きなお習字」

「へえ、道理で字が上手だと思った」

「だから3時には終わりにしなくちゃ。おじさんはいつも何時まで働いてるの？」

「一応、5時までだけど」

「さやのパパはね、タクシーの運転手をしてるから、いつも朝早くて、夜遅いの。でもちゃんとご飯の支度とかしてくれるんだよ？」

声だけ聞いていると、見た目より幼い感じにも思えるが、しゃべり方や話していることはやはり高学年の雰囲気だ。父親が食事の支度をしているということは、共働きののだろうか。

「君もあの子から見たら、『おじさん』なんだねえ」

さやちゃんが椅子に腰かけるのを見届けてから、主任は僕の背後でくすくす笑った。

「そりゃあ、もう30過ぎてますからね。正直、シヨック大ですけど」

はつきり「おじさん」と呼ばれるのは少し痛い、そこは小学生ということで見逃そう。これが大学生くらいの子に言われたら、どれだけ衝撃は深まるのだろう。こう見えても、身だしなみやスキンケアには、人並み以上に気を使っているつもりだ。

「よく懐いてるね、あの子」

「昔から、子供にだけは人気あるんです」

「俺だと、怖がらせちゃうだろうね。この風貌だし」

色黒でホームベース型の輪郭。太い眉毛に長いもみ上げ。コワモテと思えばそう見えるし、めちゃくちゃ優しいお父さんと思えばそう見える。主任の印象は、こちらの心の持ちよう次第で変わってくる。

「そんなことないですよ。主任は人あたりもいいし、しゃべり方も優しいし。今度話かけてみたらどうですか？」

「だめだめ。こなくなっちゃうよ」

「大人には強気だけど、子供には弱気なんだなあ。主任のキャラじゃないですよ」

「そうか？」

ちよつと照れた主任と顔を見合わせながら、僕らは笑った。

さやちゃんがかかるたびに、いつも主任とそんな会話をしているものだから、他の女子職員からは、まったく見当はずれの冷ややかな視線を浴びることもある。

「放っておけばいい。子の親になってみなきゃ、分からないよ」

「でも特に樋口さん、いつも怖い顔してますよね？」

「あの年齢でまだ未婚だからね。目が肥えてるからなかなかお相手かね」

「ていうか、結婚する気あるんですかね？」

「そんなこと言ったら刺されるよ？ でも確かに最近荒れてるね。更年期なのかな」

「さやちゃんもかなりびびってます」

「まったく、この職場にはごく普通の常識人はいないのかねえ」

「僕が一番普通ってことですか？」

「ああ、ほら、君にお客さんみたいだよ」

振り返ると、広報を丸めて手でぼんぼんと叩きながら、掲示板に向かって独り言を言っている男性がいる。重田さんだ。この人に捕

まると、とにかく話が長い。この前も、市が主催する落語会の抽選に漏れた愚痴を1時間も聞かされた。

「今日は主任が何とかしてくださいね？」

「俺よりも親身に話を聞いてくれるいい友達ができたと思ってるんだらうな」

「冗談じゃないですよ。おかげでその間、完全に仕事が止まってしまってますから」

「それが君の仕事でしょ。『何でも聞きます課』課長」

「そんな課長、絶対嫌です」

まだ異動があつたばかりなのに、僕はもう次のセクションに思いを馳せていた。

モニターに向かうさやちゃんの顔はいつも真剣だ。挨拶をする時の柔らかい表情ではなく、ぐっと大人っぽい、引き締まった顔つきになる。

何をそれほど熱心に、と思うが、いくら小学生といってもプライバシーがある。遠めに眺めている感じでは、使用目的通り画面が細かい文字でびっしり埋められているのが分かる。

「メールって、あのパソコンから出来るの？」

主任に弱点と言えるものはほとんどないが、唯一あるとすれば、パソコンだ。「俺はいまだに、帰宅メール以外使ったことがない」というのが、彼の自慢であり矜持であつた。僕には、矜持の意味を履き違えているとしか思えなかつた。

「もちろん、できますよ。ネットにつながってさえいれば」

「てことは、あのパソコンにもアドレスがあるってということ？」

「あ、いや、彼女が操作しているのは、おそらくフリーメールかと」「フリーメール？」

「インターネット上で操作する無料メールですよ。IDとパスワード

ドでログインして、ネットの中でメールの送受信を行えるので自宅のパソコン以外の場所でもメールできるメリットがあります。ただ、プロバイダー契約されたメールアドレスではないので匿名性が高く、犯罪に使われることも多い」

「何を言ってるのかよく分からないけれど、君は間違いなく進む道を間違えたね」

「ていうか、誰でも知ってるかと」

「知らない人を目の前にして『誰でも知っている』は矛盾しているとは思わないかね？」

「そんな次長みたいな言い方やめてください」

相手は誰なのだろう。まさか、出会い系で知り合った男じゃないだろうな、と老婆心ながらいらぬ心配をする。最近は小学生の出会い系サイト利用率が増加の一途をたどっているようだし。

さやちゃんのようにパソコンを使える子なら、まんざらありえない話でもない。しかし、出会い系なら携帯電話を使う方が一般的だろう。

年齢を考えて、僕はまず「出会い系」の可能性は否定した。そして次に浮かんだのが、好きな男の子へのラブレターだ。

なるほど、そろそろそういう年頃だろうし、携帯を持たない者同士がパソコンを通じてメールのやりとりをする、ということは十分ありうる。

しかし、毎日学校帰りにここに寄ってメールチェックをして帰るということは、自宅にはネットに繋がったパソコンがない、あるいは親のパソコンなので、彼女には触れさせてもらえないということだろうか。

いずれにしても、僕がそこまで彼女のプライバシーを詮索しても仕方ない。小学生のライフスタイルを研究してるわけでもあるまいし。

「ふうつ」とさやちゃんはフロア全体に聞こえるくらいの大きな息を吐いた。

「お疲れ様」

僕はもう一方のぼんこつパソコンをメンテナンスするふりをしながら、彼女の作業の邪魔にならないよう、さりげなく声をかけた。

「今日はたくさん書いちゃった」

さやちゃんの前髪はしっとり濡れ、眉毛まで届くか届かないかわらないの髪が、いくつかまとまって均等に並んでいる。スカートからハンカチを出して生え際の汗を押さえつけるように拭う。

「いつも何を書いてるの？」と僕はそれとなく聞いた。

「内緒」とさやちゃん。「でもおじさんになら、教えてあげてもいいけど」

おじさん。いちいち気にするな。

「ママへのお手紙なの。たまにしか会えないから」

「ママ。そうかあ、お母さんへのメールなんだ」

メールの相手が母親と聞いて、僕は内心ほつとした。しかし、たまにしか会えない、という言葉を挟んで、彼女の表情が、やや色を失ったことに気がつき、僕はそれ以上聞かない方がいいかな、と判断した。

「あと一ヶ月でまたお家に戻ってこれそうなんだって。だから、もうちょっと、ここ使わせて」

「もちろん。今度『さやちゃん専用機』って張り紙しておいてあげる」

「専用機なんて、ちょっと格好悪い」

「じゃあ、『ONLYさや』は？」

「おんりー、って何？」

「じゃあ、『さやオリジナル』」

「おりじなる、もよく分からないけど、それならまあまあ」

「まあまあ、か。よし、次くる時までを考えとくよ。宿題にしといて」

「うん！」

しゃべってみると口も達者だ。人見知りや物怖じもしないし。

さやちゃんは最後に「ありがとう」と微笑んで、ランドセルを背負った。ランドセルは、きつと入学以来使っているものなのだろう、蜘蛛の巣のような細かいひび割れがびっしり。角の部分はもう塗料がはげて、茶色い素地が露出している。

それでも、彼女はランドセルを実に丁寧に背負う。決して、振り回したり、腕を持って引きずることはない。仕草の一つ一つにまで、躰が行き届いている。

「気をつけてね」

「うん。大丈夫だよ。すぐそこだもん」

「その油断が命取り」

「命？ 命取られるの？」

「最後まで気を抜かないで気をつけてねってこと」

「はい。わかりました、先生」

今度は先生ときた。先生と呼ばれることなんて、きつと何度生まれ変わってもありえない。

「じゃあ、また明日」

「はい。さよなら」

刃渡り20センチ程の鋭利な視線を感じたのでカウンターに戻ってみると、樋口さんがじつとこちらを見ていた。彼女の視線は、もはや凶器だ。

やはり、一言言っておいた方がいいのかもしれない。きつと、彼女の頭の中では僕がいつか児童福祉法違反やなんかで手錠をはめられている姿を想像しているに違いない。

パソコンをクリーンアップする間も、僕はしばらく宿題のことを考えていた。誰からも文句言われることなく、それをさやちゃんのマシンだと気付かせる方法。

それは、こっそり彼女にウエルカムメッセージを送ることのできる我ながらいいアイデアだった。

スクリーンセーバーを活用する方法。

僕はテキストにすべき文句を考える。「いとしのさやー」。サザンのパクリだ。「こんにちは、さやちゃん」。赤ん坊じゃないだろう。「さやキスト」。すかっとなさわやか柑橘系。「さや命」。アナクロにも限度が。「さやの心」。仏壇あるいは介護ステーション。

全くセンスがない。仕方なく、一番最後に思いついた言葉を打ち込んで、ロールする位置やら、回転する速さやらをプレビューで確認し、設定を終了。

「毎日が、さや曜日」。

ややもすると気恥ずかしくて噴き出してしまうような文句だが、自分としては、これまでで一番ましなフレーズだった。さやちゃん自身が気に入ってくれるかどうかは、大いに疑問だけれど。

翌日の午後は、激しい雨が降っていた。空はすでに日が沈んでしまったかのように真っ暗で、遠くで雷が鳴っていた。排水溝は完全にオーバーフローしており、駐車場全体が雨でできた池の中に沈んでいた。

さやちゃんがびしょびしょになりながら来所したのは、もう4時

に近かった。

こんな酷い雨では傘を差していても顔以外ほとんど用をなさない。元来の生地の色を思わせる部分がほとんど残されていないくらい、スカートは濡れて変色している。運動靴の中にもたつぷり雨水を含んでいるようで、さやちゃんが歩いたたびに「きゅ、きゅ」と滑稽な音が出張所内に響く。

「大変だったね」と言って、僕はおろしたてのタオルをさやちゃんに渡す。

「うっん、雨って嫌いじゃない。楽しい。おじさんがちゃんと宿題やったかどうか、確かめに来たんだ」

さやちゃんはタオルの形を崩さないように、丁寧に顔をこする。

「もちろんだよ、ほら」

スクリーンセーバーには、例のフレーズがゆらゆらと木の葉のように舞っている。さやちゃんは少しずつパソコンに近づきながら、モニターの画面をじっと見詰めている。僕はまるで人間ドックの検査結果を告知される時のような気分で次の言葉を待っている。

「『さや曜日』かあ。何かコマーシャルで流れてきそうな感じ。』

や』と『よ』の繋がり方が変な感じするけど」

「『や』と『よ』の繋がりが変わて。ねえ、さやちゃん、本当に4年生?」

「やっぱり、おじさん、『さや専用機』でいい」

「あ、はい」

いろいろと考えてはみたものの、結局、元のさやに戻るわけだ。ちやんちゃん。

「考えてくれて、ありがとう」

今日はいつもより余計に頬が赤い。きめ細かくて、すべすべの肌。これぞ、ベビーフェイスというやつだ。この肌を保つために、世の女性達は多くのお金と時間を惜しみなく費やす。

主任が受付のカウンターに座り、鉛筆を走らせるさやちゃんの様

子をいとおしそうに見ている。

「いえいえ、どうぞごゆっくり」

「うん、どうもです」と言っつて、さやちゃんは髪の毛を自分で縛り直しながら、僕ではなく主任に微笑んだ。その笑顔は、これまでも見たこともない、ありつたけの笑顔のように思えた。どうやら彼女の中では、主任は怖い人ではなく優しいお父さんに見えているようだ。

出張所には、さやちゃん以外お客さんはいない。閉庁まであと1時間。さっきまでの雨も、弱まりつつあるようだ。西の方ではうっすらと日の光が覗き始めている。これからはこういう夕立が多くなるんだろうな、僕は貸し出し用の傘の本数をチェックする。

この出張所で一番自慢できることは何か、と問われれば、僕は真っ先にこう答える。

「貸し傘」が1本もなくならない、ということだ。

それから数日間雨は降り続いた。その日のさやちゃんは、様子が変わった。いつものように姿勢を正しかたかたキーを叩くことはなく、じっと画面を見つめているだけだった。もう10分以上は、その状態が続いている。

僕は異変に気がついていて。主任も自分のデスクで作業をしながら、ちらちらと彼女を見ていた。僕は主任の席に何気なく近づき、静かに耳打ちをした。主任の席からは、ちょうどさやちゃんの横顔あたりを見ることが出来る。

「泣いているよね？」と主任は僕を見ずに言う。声のボリュームを極力抑えて。

ハンカチを時々目に当てているところを見ると、確かにそのようにも見える。お母さんに、何かあったのだろうか。

しばらくして、さやちゃんは椅子を引き、ハンカチを握り締めたまま僕を目で探す。

「お疲れ様。今日はもういいの？」

こくり、と力なく頷くさやちゃんの頬は白かった。帰り際、こんなに暗いさやちゃんの顔を見るのは初めてのことだ。いつも来た時以上の笑顔で帰っていく子なのに。

「どうしたの？ 何かあったの？」

「お母さん、しばらく、連絡できないかもしれない、って。メールを打つの、かなりしんどいんだって」

言葉に出すのもやっと、という感じでさやちゃんは肩を落とす。

背中のレストランが鉄の塊に見える。

「どこか体の調子、悪いの？」

「うん。ずっと入院してるの、東京の病院に。遠いから何度も会いにはいけない。だから毎日こうしてメールしてるの」

「そうだったんだ」

何となく想像はしていたが、こうして本人の口から直接聞くと、やはり切なくなってくる。

「昨日『だいぶ元気になったよ』って言ってくれてたのに」

勉強したまま眠っている子供にそっと毛布をかける母親のような視線を背中に感じる。この感触、もちろんお局ではなく主任であるのは間違いない。

「また、明日来ます」

さやちゃんは最後にそう言って、僕らのいるカウンターに背を向けた。

「あ、さやちゃん、傘、傘」

ついさっきまでずぶぬれだったことさえ忘れているさやちゃんに、傘立てに刺さっている唯一丈の短い赤い傘を彼女に手渡す。

ありがとう。

僕には確かに彼女の気持ちは伝わってきたが、実際に言葉に出し

てそう言ったのかどうかは分からない。多分、言ってくれたとしても、ほとんど聞き取れないくらいの小さな声だ。

僕は彼女の姿が視界から完全に消えるまで、ずっとエントランスで見送っていた。雨上がり特有の生臭い臭いが、町全体を包みこんでいる。

病気。

いずれにしても、一ヶ月以上入院しなければいけない重い病気を、彼女の母親は患っている。毎日ここへきて一生懸命に打っているメールは、会うことの許されない母親との唯一の楽しみなのだろう。食事の支度を父親がしている、ということもこれで合点がいく。

よほどシヨックだったのか、パソコンの画面は、フリーメールの受信箱が開かれたままになっていた。送信元のアドレスから、母親は携帯電話でメールを打っているようだ。

件名は全て「大好きな、さやちゃん」。

受信時間は、大体朝の7時前後に集中している。1日1通、土日は出張所が閉所のため、平日限定なのだろう。

「こんにちは SAYAKA0910 さん」

ログイン情報。アルファベットと数字の部分が、さやちゃんのIDだ。0910は誕生日だろうか。

少しだけ、本文を開いてみたい衝動にもかられたが、それは止めておくことにした。いくらログインしたまま帰ってしまったとはいえ、人のメールを盗み見るのは気が引ける。ましてや、これは入院中でなかなか会うことのできない母と子のささやかな交流なのだ。僕はそのままブラウザを閉じ、履歴を消去する。

「東京の病院にいるんだ、お母さん」

彼女との会話を伝えると、主任は作業する手を止めて言った。

「小学生で母親と離れ離れなんてね。お父さんも朝晩びっしり働い

て、さやちゃんのお食事の支度までするなんて、全く頭が下がるよ」「さっきのさやちゃんのお落胆振りには少し心配だ。明日くる、とは言っていたが、あの様子では本当にくるかどうか分からない。メールが打てないくらいだから、なかなかやつかない病なのかもしれない。母親と言ったって、僕と同世代くらいだろうに。」

翌日、さやちゃんは約束通りやってきた。いつものように受付をし、いつものように「インターネット閲覧コーナー」に座り、いつものようにフリーメールのブラウザを開く。そして、もの一分も経たないうちに、さやちゃんは席を立ち、こちらに向かって目礼をした後、背を丸めて出張所を出て行った。ちよつとトイレに行っている間に見過ごしてしまいうくらいの、ささやかな訪問だった。

どうやら母親から返事のメールが来ていなかったようだ。どうにかしてあげたいが、どうにもできない歯痒さ。それは主任も一緒だろう。重田さんの話をじっくり聞いているふりをしながら、時々こちらに向かって探りの視線が飛ぶ。さやちゃんの沈んだ顔を見るのは、僕よりも主任の方がずっと辛いに違いない。

そんな状態が数日続いた後、見送りのためにエントランスまで出ていた僕にさやちゃんは小さな声でこう言った。

「ねえおじさん、お願いがあるんだけど」

「何？」

「お母さんからメールが来た時、来たことが分かるようなことってできる？ ここに毎日来ないと駄目なのかな」

『受信通知』のことを言っているのだろう。さやちゃんの瞳には、若い子特有の輝きと生気はなく、まるで長い間押入れの奥に仕舞われていたビスクドールのようなだった。

「インターネットにつながなくても分かる方法はあるよ。『メール

が来た』っていうお知らせメールを他のパソコンとか携帯電話に転送すればいいんじゃないかな」

「転送つて？」

「あ、ええと、さやちゃんは、携帯電話とか持ってる？」

「持ってない」

「家にパソコンはあるの？」

「欲しいけど、ない」

「そっかあ。どうしよう」

パソコンも携帯もない、となるとどうやって通知すればいいんだろう。ここは、僕が一役買ってあげるしかない。

「じゃあね、もしメールが着たらおじさんの携帯電話に連絡があるようにしておくよ。そしたら、さやちゃんに教えてあげる。さやちゃんの家は、3丁目だったよね。どの辺り？」

僕がそう言うと、さやちゃんの顔に少しずつ明るさが戻ってくるのがはっきりと分かった。

「その横断歩道を渡ってから、タバコ屋の角を曲がっていくの。コインランドリーがあるところ、分かります？」

「分かるよ。最近新しくできたよね、コインランドリー」

「そののね、2軒隣のアパート」

「そうなんだ。それならすぐそこだね。ポストはある？」

「うん。階段の下」

「オーケー。もしメールがあつたら、真っ先にメモ、ポストに入れておいてあげるから、そしたらまたここにおいで」

「うん。ありがとう、お兄さん」

さやちゃんは髪の毛が地面につきそうなくらい深く頭を下げた。

僕はなかなか顔をあげようとしないうさやちゃんの肩をぼんと叩いた。子供に頭を下げさせるなんて、こっちが恐縮する。

「じゃ、早速設定してみようか。もう一度パソコンでメールの画面

開いてもらってもいい？」

「うん」

我々はとって返し、「毎日が、さや曜日」のスクリーンセーバーを解く。

僕が彼女に付き添っている間は、職員谁也僕に関与しようとしてない。従って、急な仕事を回されることもない。

さやちゃんは今や職場の誰も知っており、ケアをするのは僕が主任、ということが暗黙の了解となっている。文句を言う割りに、理解のある同僚たちだ。

加えて、小うるさい次長は給湯室で無気力状態、樋口さんは幸い有給休暇中なので、背筋に寒気を覚える必要もなく安心して応対できる。言葉の通じない外国人の住民票発行に手間取っている主任は少し気の毒だったが。

さやちゃんがIDとパスワードを打ち込む。メールの受信画面。新着メールなし。

「じゃあ、ちよっといいかな」

僕はさやちゃんを椅子に座らせたまま、隣にしゃがみこんで、「設定」ボタンをクリックする。転送先に自分の携帯電話のメールアドレスを入力し、このメールがお母さんとのやり取りにしか使っていないことを確認してから、お母さんの携帯アドレスだけを「指定受信」するよう設定した。

「これで大丈夫。メールが入ったら、必ず知らせるからね」

「うん。パソコン使わせてくれて、今までありがとうございました」

「おいおい、もう二度とこないみたいない方しないですよ。寂しいじゃん」

「いつメールくるか、分からないんだもん」

再び俯きかけたさやちゃんの肩を両手で支えて、絶対にそんなことはないから、と眉間を締めた。

「今は無理かもしれないけれど、また体の調子が戻れば絶対メールはくるよ。さやちゃんが待っている限り」

「本当？」

「うん。お母さん、今、一生懸命病気と戦っているんだよ、きつと」

「赤ちゃんを育てるお部屋のガンだつて、お父さん、言つてた」

「そう」まだ若いのに、ガンだなんて。

「今はいいお薬あるから大丈夫だよ。東京の病院なら、いいお医者さんもいるしね」

「でも、どうしてメールできなくなつちやつたの？ メールもできないくらい、悪くなつちやつたの？」

「たぶん、今がすごく大切な時期なんだと思う。さやちゃんとのメールを休む代わりに、その分病気に勝つ力をいっぱい蓄えているんだと思うよ」

「お父さん、仕事忙しくてなかなかお見舞いにいけないけれど、多分、土曜日にいけるから、その時会えるかな」

「会えるといいね。やっぱりメールじゃなくて、実際に会つて話するのが一番だよな」

「うん！ ありがとう。じゃあね」

僕は早速、主任を相談室に呼び、これまでの事情を話す。僕の話聞き終えるまで、主任はじつとテールクロスを見つめながら何も語らなかつた。話を聞き終えてからも、しばらく主任はじつとしたまま、次に言うべき言葉を探していた。

ようやく、主任は一度大きく息を吐き、「全く、いろんなことがあるね」と独り言のように言った。「まだあんなに小さいのに」

僕はそれには何も答えず二度、三度と頷いた。主任と全く同じ言葉を思い浮かべていたから。病気で苦しんでいる人を見ると、普通の日常生活を送れることがどれだけ幸せなことか、というのが痛いほど分かる。職場や職種に不満を言うことなんて、そういう人たちから見ると、とても贅沢なことだ。

もし、自分の妻がガンだなんて宣告されたら、僕はこの職場で仕事をし続けることができるだろうか。もし、自分の息子が交通事故で亡くなったら、我俣で理不尽な市民の話など長時間聞き続けることなんてできるだろうか。

そう考えると、先輩面もせず、僕みたいな小生意気な後輩の面倒を見てくれる主任が、いつも以上に大きく見える。主任は僕と違って、とてもタフな人生を送っているのだ。

「メールがこない限り、さやちゃんもこないってことだよな」と主任は言った。

「ですね。こればかりは何とも」

「閲覧コーナーの利用者、また減っちゃうね」

「だからといって、スクリーンサーバーは変えませんか」

「ん？ サーバー？」

「あ、いや、もう一度さやちゃんがくるまでは、絶対にあの場所は死守しなくちゃ」

僕は何となく主任の考えていることが分かる気がした。そして、一日でも早く、僕の携帯電話にメール受信のバイブが走ることを願った。

それからの一ヶ月間というのは、長いといえば気の遠くなるほど長く、短いといえは瞬く間に過ぎ去った一ヶ月だった。

自分の妻からのメール以外、友人を含めた何通かの着信はあったが、「さやちゃんママ」フォルダにメールが振り分けられることは一度もなかった。

僕と主任は、淡々と日々の仕事をこなしていた。来るはずないと分かつてはいても、午後になると何となくパソコンのマウスを動

かしたり、椅子やテーブルを拭いたり、記入しやすいように受付簿のボールペンを横に置いたり、いつ彼女が来ても受け入れられる準備だけは整えていた。

しかし彼女がなくなつてから、「インターネット閲覧コーナー」は瀕死の状況を迎えていた。この3日間で、利用者2名。うち、1名は通りがかりの公民館の職員なので身内と一緒に、そしてあとの1名は重田さんだ。もっとも重田さんはパソコンなどに触れたことはないので、しばらくマウスでカーソルを動かしているだけで、すぐに飽きてしまった。きつとまた文句を言ってくるに違いない。文句をいいたいがために使ったようなものだ。それに最近、迷惑画像を落としてまくる暇な若者すら訪れなくなっていた。

拳句、「閲覧コーナーの机が出っ張つていて、2階に物を運ぶ時邪魔になる」なんて「目安箱」に投書した市民がいたもんだから、次長を筆頭に「撤去推進派」の氣勢は上がる一方になってきていた。とにかく、さやちゃんとの約束もあるので、僕と主任は様々な言い訳をくつつけて「存続の必要性」を主張するものの、裏づけとなる実態がこれでは、どうにも説得力がなく、次第に意気消沈していった。

\*

「死亡届」とともに、僕が初めてさやちゃんの父親と会うことになるのは、それから間もなくのことだった。

\*

ちょっとした雑用から戻ってくると、主任が俯き加減に「お客さんだよ」と相談室を指差した。僕はその主任の様子から、これは歡

迎すべき話ではない、ということ在即座に理解した。

和郎さんは、名前から想像していたような古風さもいかめしさもなく、白のポロシャツにベージュのチノパン、髪の毛もさっぱりと刈り込まれた、清潔感のある男性だった。

「娘がいろいろとお世話になっていたようで」

相談室の和郎さんは、ひどく恐縮しながら言った。

「このことはたびたび聞かされていました。出張所の方にとっても親切にしてもらっていると。自分専用のパソコンがあるんだよなんて、自慢するんです。かつこよくて優しいおじさんと、髪の毛の白いおじさんがいつも待っていてくれるって」

声の調子も低く、和郎さんはとても落ち着いているように見えた。

「女の子は男親に似る」という通り、眉毛のラインや顔の輪郭が、さやちゃんによく似ていた。

「最初のご挨拶がこんな形になってしまった」

僕はどう答えていいのか分からなかった。今、さやちゃんがどんな顔をしているのか、想像つかなかった。

「仕事柄不規則な生活で、家族とちゃんと接してあげる時間が本当になかったんです。自分が家にいない分、妻が無理をしてしまったんだろうと。収入が少ないから、自分たちのことで病院にかかる、ということを暗黙のうちに遠慮してしまった。」

どうにも痛みが治まらないので、仕方なく病院で見てもらった時にはすでに転移してまして。東京の大病院でももう手に負えないと。僕の責任です。すいません、初対面なのに、こんな話」

そんな大事な話、まだ息の上がついている状態で聞いてよいものかどうか。

「いつも二人で話をしていたんですよ。さやちゃん、すごくしつかりしているから、一体ご両親はどんな人なんだろうね、と」

「恥ずかしい父親です。うちのことは、全て妻に任せで。私は妻に

何もしてやれなかった」

和郎さんはそこで一度話を区切り、目の前の届出書を改めて眺めていた。今日の受理印を押した控えの用紙。「加無木絵里」というのが、奥さんの名前だ。

さやちゃんのことを思うと、僕は息苦しさすら覚えた。さやちゃんには、一体今どんな状態なのだろう。どんな気持ちなのだろう。あんなに楽しみにメールを待っていたのに。

「でも、まさかメールを送るために毎日来ていたなんて、全く知りませんでした」

和郎さんは言葉の一つ一つを噛み締めるように、ゆっくりと、しかし確実に言葉を繋げる。

「うちのは、メールなんて全くやらないと思っていました。もちろん、携帯電話は使っていました。メールを打っている姿なんて見たことありませんでした」

「お父さんは、タクシーの運転手と伺っていましたが」

「タクシーは多くの時間を働かなければ、子供を育てていくことなんてできません。まだ免許とったばかりなんです。道もよく知りませんし。とにかく、この半年間はめちゃくちゃに働いていました。」

その間に、妻の病気はどんどん進行していたんですね。何も気付いてあげられなかったのが悔しくて。あいつの携帯には、さやかがここから打ったメールしか入っていませんでした。一通一通、たくさん書いてあるんですよ。画面を何度も切り替えなければならぬくらい。操作は教えていただいたんですか？」

「いえ、僕は何もしていませんよ。全てさやちゃんが行っていましたから。今の子は覚えるの、早いですからね」

「私もメールを読んでびっくりしました。そんな言葉をどこで覚えてくるのかと。大人がするような話し方を、普通にするんです」

「女の子は、特に口達者って言いますから」

「ですね。全く、妻が2人いるような感じで」

話を聞き始めてから、初めて和郎さんの頬が緩んだ。僕もようやく息が整い、ふつと肩の力が抜けた。

「さやちゃん、大丈夫ですか？」

和郎さんは視線を落とし、両手を軽く握り直してから、僕の方を見ずに言った。

「今でもまだ、あまり口を聞いてくれません」

当然のことだ。その年頃の子供にとって、母親は自分以上に大切な宝物なのだろうから。

「いなくなつたことを信じようとはしないんです。いつか帰ってくる、今はちよつと違うところにいるだけなんだ、いつもの買物物から帰ってくるように、」さやか、ただいま。大好きなさくらんぼ、買ってきたよ』なんていいながら戻ってくるんだと、玄関にスリッパを置いて待つているんです」

和郎さんの瞳は潤んでいた。それを見て、僕も顔がほてるように熱くなった。小学生に母親の死を受け入れると言つてもそれはあまりに酷な話だ。

「いつかこういう日がくるって分かっていても、やっぱり今までそこにあつたものがなくなるのは、とても寂しいことです。化粧台も、洋服ダンスも、本当にちよつと買物物に行つてただけで、また夕方になれば戻ってくる、そんな感じでそこにあるわけですから。家には妻が買ったもの、妻が使っていたもの、妻が作ったもの、妻が身につけていたものばかりあるのに、何故かその妻がいない。とても不思議な感じです。大人の私でさえそんな状態ですから」

結局、メールはあの日を最後に途絶えた。以来、さやちゃんのお母さんがどれほど苦しみ、耐え、そして無念の中でこの世を去つていったのか、それは安穩と生きている僕のような人間には想像もできないことだ。

きつとよくなるよ、なんて気安く口走った自分自身が、乾燥した木の葉のように軽く薄っぺらに思えた。自分は何も知らない。何も分かっていない。ただ毎日、何の進歩も成長もなく、いつか自分にも必ず訪れる死へのタイムリミットを、刻一刻と刻んでいる。僕は「今を生きている」のではなく、「死へ近づいている」だけだ。

この町に住んでいてよかった、と思える市民サービス。僕が今、加無木家のためにできること。素敵な笑顔で元気をもらった彼女へのささやかな恩返しとは何か。

「死を受け止められるようになるまで、さやかにはゆっくり時間をかけて話をしていくつもりです。どういう方法がいいのかまだよく分かりませんが」

「いつでもここに寄ってください。異動がない限り、僕と主任は必ず窓口におりますから」

和郎さんが何度も頭を下げて出張所を後にしてから、僕は電卓をはじいていた主任の肩を軽く叩いた。

「さやちゃん、気になるね」と主任は言った。

「でもたぶん、たぶんですが、それほど時間かからないうちに、また元通り元気な彼女に戻ってくれる気がしてます」

「『インターネット閲覧コーナー』の救世主になれそう？」

「というか、彼女の他に誰がいます？」

和郎さんの言葉を信じよう、そう我々は心に決めた。さやちゃんは、必ず戻ってくる。少し時間がかかるかもしれないけれど。その時まで、何としてもコーナーだけは死守しなければならない。僕と主任は顔を見合わせながら、無言の握手を交わした。

メールに気がついたのは、和郎さんに会った1週間後のことだった。充電器に刺さったまま、緑色に点滅するイルミネーション。家

にいるのに、妻がメールをするわけではない。

まだ寝ぼけている僕の頭では、それ以上想像を膨らませることができなかった。携帯を広げ、メールを開く。

SAYAKA0910 さんにメールが届きました。

「送信者」 lovelysayaka@ .ne.jp

え？

そのメッセージを見るまで、僕はさやちゃんのフリーメールが、いまだ僕の携帯に転送するよう設定されていたことをすっかり忘れていた。

それにしても、何故？

指定アドレスからの受信転送しかしていないのだから、お母さんの携帯からなにがしかのメールが送られてきたことは間違いない。

ただでさえぼんやりしている思考能力が、ある一つのタスクをやり遂げなければならぬ、ということだけでいっぱいになった。一刻も早くさやちゃんに知らせる、ということだ。

僕はいつもより30分早く家を出て、スクーターのアクセルを目いっぱいひねった。とにかくメールを開いてみなくちゃ分からない。メールはさやちゃんじゃないと見ることはできないのだ。

以前、教えてもらったアパートの場所はすぐに見つかった。その辺りで集合住宅というのはそこだけだった。10世帯程の小さなアパートだが、郵便受けはダイヤルロックのついた立派なものだった。「加無木」という名前はすぐに見つかった。間違いない。

僕は手帳からメモ用紙を一枚引きちぎり、ほとんど殴り書きで「お母さんからメールが来てるようなので時間のある時にまたおいで

市旭が丘出張所 水野」と書いてポストに入れた。

入れたあとで、久しぶりなのに何の挨拶もなしなんて大人の対応としてはいかなものか、もしかしたら忘れようとしているかもしれないのに、いきなり「お母さんから」なんて表現をしてもよかつたのだから、いや、メールがきたと教えたこと自体が大きな間違いかもしれない、と様々な後悔で頭が一杯になった。

でもこれは約束なのだ。さやちゃんと僕だけの、約束。いや、ちよつと待て。時と場合を考えろ。どう考えても、母親からのメールな訳がない。いたずらか、間違つて送られたか。それじゃ、またさやちゃんをがっかりさせるだけだ。

何やつてるんだ俺。

僕はアパートのポストの前で、メモを落としたその右手を掴んで自身を罵った。しかしもう今更後悔しても仕方ない。謝るにしまつて、さやちゃんが出張所にくることを待つしかなかった。

その日はどうにも落ち着かなかった。以前と同じようにさやちゃんを待っているわけだが、待っている心持ちが180度違う気がした。会いたい、という反面、どんな顔をしてくるのか会つのが怖いとも思つた。デリカシーのかけらもない僕を、彼女はまた以前のように受け入れてくれるのだろうか。

「くるのかな」「と、僕は主任に言った。

「どうだろうね。でも、君の判断は間違つていたとは思わないよ」と主任は気休めではなく真面目な顔をしてそう答えた。

「だって、それは事実なんだから。約束は守らなくちゃね」

「でもやつぱり間違つて送られたとしか。過去の未送信メールが送信されたとか。あ、待てよ。もしかして」

「さやちゃんじゃない？ あれ」

ランドセルを背負つた女の子が、エントランスでじつとこちらを

見つめて立っている。たぶん、僕とさやちゃんは、10秒間くらい  
そうして固まっていたのだろう。僕は無意識のうちにさやちゃんに  
歩み寄り、自動ドアより中に彼女を引き入れた。

髪の毛が短くなったせいなのか、悲しみに打ちひしがれていたせ  
いなのか、前より顔がほっそりしたように見える。

「メールって？」とさやちゃんは口を開いた。誰かの咳払いが一つ  
あつたら消えてしまいそうなほどの小さな声で。

「突然のことで僕もびっくりしたけれど、でもメールがきてること  
は本当なんだ」

「さやかのママはね、ママは死んじゃったんだよ」

「お父さんから聞いたよ。さやちゃんのお父さん、とても優しい感  
じの人だね」

顔をあげたさやちゃんの目には少し涙が浮かんでいた。でも、必  
死に泣くまいと我慢している様子が痛いほど伝わってくる。僕も、  
涙がこぼれそうになるたび「国民年金は口座振替で」とかかれた大  
きなポスターに目を向けた。

「もう準備できてるから」

僕がそう言うと、さやちゃんはいつもの指定席にゆっくりと腰掛  
けた。

おかえり、さやちゃん。

さやちゃんはしばらくそう表示されたスクリーンセーバーを眺め  
ていた。そして、ありがと、と僕に言った。半分だけしか振り向か  
なかったけれど、彼女が笑っていたのに気がついた。僕は、ううん、  
と顔を横に振って笑い返した。その一言に、僕はとても救われた気  
がした。

僕は彼女からさりげなく離れ、受付表に「加無木さやか」と記入した。住所も電話番号も前にさやちゃん自身が記入した筆跡をお手本にしながら、「書き方」の練習をしているように丁寧に書いた。さやちゃんは肩を小刻みに震わせ、声を立てずに泣いているようだった。それは悲しみの涙なのか嬉しさの涙なのか。

今は亡き母からのメール。

僕も主任も、静かに小さな背中だけを見つめていた。いや、我々だけではなく、職場にいる誰もが各々の手を休め、さやちゃんを見ていた。住民票を取りにきていた年配の男性も、一体何があったのか、というように「インターネット閲覧コーナー」に目を向けていた。

やがて、さやちゃんはハンカチをスカートから出して顔を拭い、目で僕に合図をした。

「お母さんからだった？」と僕は聞いた。

「うん、お母さんから。天国にいるお母さんからのメール」とさやちゃんは躊躇なく言った。

液晶画面のメールは開かれたままだった。それは見ないようにしようと思っても、その網膜の残像だけで理解できてしまうくらいの、あまりにも短い文章だった。

「件名」 大好きな、さやか

「本文」 お母さん、ちよつとのあいだおでかけしてくるけれど、いい子にしててね。さくらんぼ、いつものところに入ってるから。お父さんの言うこと、よく聞いてね（^^）

「お母さんの顔文字使ってるメールって、始めて見た」

そう言うさやちゃん顔は決して悲しげなものではなく、むしろ楽しんでるようにも見えた。

「返事は書く？」

「もちろん。だって、お母さんにメールするの、とつても久しぶりなんだもん」

さやちゃんは笑って、優しくマウスに触れながら、返信ボタンをクリックした。

黒くて太い和郎さんの指が、携帯電話の小さなボタンの上を、一文字ずつたどたどしく移動する様子を、僕はふと想像した。あれだけ大きな手だと、手のひらの中でメールを打つのは容易なことじゃない。2つのボタンを同時に押ししてしまいそうだ。

それがいいことなのかどうか、僕には分からない。おそらく、それは誰にも分からないだろう。

けれども、新しい親子の絆がそこに芽生えつつあることは間違いない。何より、さやちゃんは気付いているのだ。それが本当に天国にいる母からのものなのかどうかを。

ひとしきり打ち込んだ後、さやちゃんは僕に、「これからまた、毎日寄ってもいい？」と聞いた。もちろん、と僕は言った。

「あのパソコンは、さやちゃん専用だから」

そう言うのと、さやちゃんは顔が崩れるくらい、目を細めて笑った。僕は遠目で見ている次長に向かって、さやちゃんにも聞こえるように、わざと大きな声で言った。

「次長、『インターネット閲覧コーナー』は、当面継続ということですよ、よろしいでしょうか？」

苦虫を噛み潰したような顔をしていた次長も、さすがに可愛い利用者の前では駄目だ、とも言えず、反則だが仕方ない、と言ったようにゆっくりうなずいた。

「今年度は任せるよ。でも来年度以降は、実績が全てだからね」

やった！

主任もそう心の中で叫んだに違いなく、次長に気づかれないうちに、僕に向かつてにつこり笑いオーケーサインを送る。ついに僕たちは、史上最低の利用実績にもかかわらず、史上最強の利用者のおかげでコーナーの存続を勝ち取ることができたのだ。

ただし、継続するための唯一の条件。2階への搬入の邪魔にならないよう、テーブルを50センチだけ、壁際に寄せること。

「じゃあ、また明日ね。教えてくれてありがとう」

「いつでも待ってるからね。お父さんにもよろしくね」

「今日はね、お父さん、早く帰ってくるの。そしたら、ご飯食べにいくんだ」

「やったじゃん。優しいお父さんで良かったね」

「うん！」

エントランスを出ると、空は緞帳が降りたように暗く、低い雨雲が頭上を流れていた。風の上がり具合からして、間もなく激しい夕立がくることは間違いないようだ。すでに、ぽつぽつと、黒い斑点状のしみが白んだ駐車場のコンクリに散らばりつつあった。このうつとおしい季節も、もう間もなく終わる。

「傘、持ってきた？」

「ううん」

「この傘で良かったら、持ってって」

僕はちようどさやちゃんの身長に合うくらいの、黄色い傘を一本渡した。小学生用の傘はその一本しかなく、最近購入したばかりのもので、まだ一度も開いたことはなかった。もちろん小学生用の傘を用意したのは、さやちゃんを想定してのことだ。

「返すのはいつでもいいからね」

「明日必ず持ってくるね。ありがとうございました」  
そう言って、さやちゃんはぱちん、と傘を差し、徐々に密度を増す雨の中に飛び出していった。開いてみると思ったより大きく、さやちゃんもランドセルもすっぽり隠れるほどだった。

明日じゃなくても、さやちゃんはまた必ずくる、その時の僕は自信たつぷりだった。

なぜなら、出張所では、傘がなくなったことは過去に一度もないのだから。

<了>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4254u/>

---

きっと、また、会える。

2011年6月28日05時40分発行